

## ホログラフィック・ディスプレイ研究会報告

岩田 藤郎

凸版印刷(株)中央研究所 〒110 東京都台東区台東 1-5

この会の成立および活動についてはすでに本誌第9巻(1980年)第6号および第11巻(1982年)第1号に述べられているが、ここではより詳しく会の活動状況について報告したいと思う。当初25名程度で出発した会員数は増加を続け現在75名に達している、その内訳は大学、高校、国公立研究機関関係(学生を含む)36名、会社関係29名、個人9名、外国人1名となっている。

またこの会は光学懇話会の研究グループの一つであるが、会員はいわゆる技術系の人間だけではなく、この技術を利用していく立場の美術系の人たちも多いのが特徴であり、その点で特異なグループであるといえるかもしれない。これはホログラフィーのような新しいメディアが実用化されていくためには技術側、すなわちハードウェアの開発も重要であるけれども、これを使用する側、すなわちソフトウェアもきわめて大切であるとの認識に基づくものである。新しいメディアはその利用面において十分に効果を引き出すためにはその技術を良く知ることが不可欠であると考えられ、さらに逆に技術をうまく利用してもらうためには、その利用面についても技術者の方から理解を深めていく必要があると思われる。このような形態をとる研究会は比較的珍しく、基本的に異質とも思えるグループが一緒に活動していることではユニークであり、とくに海外から注目され入会を希望する問合せがかなりある。しかしながら実際には会報が日本語であるところから、まだ入会する人はほとんどないのが現状である。

なおこの会は設立当初から海外との交流を進めることを基本方針としており、海外におけるホログラフィック・ディスプレイに関する機関、グループ等と積極的に連絡をとり、こちらからわが国におけるホログラフィック・ディスプレイに関する情報を提供することと引き替えに海外からも情報を得ている。これによって海外におけるホログラフィック・ディスプレイ関係の情報が集まるので、これはそのつど例会および会報を通して会員に連絡されている。また逆にわが国におけるニュースがたとえば米国の Museum of Holography の機関誌である

*holosphere* にたびたびとりあげられ、わが国の現状が世界的に知られるようになるなど交流の成果が得られている。

例会は年4回開かれ、1983年2月までは原則として東京大学生産技術研究所をお借りして行なっていたが、現在はまわりもちの形になっている。通常は講演を2件と連絡事項で午後2時から5時過ぎまで行なわれているが、内容的には美術系の人にも会員になっているので技術的なものだけではなく、美術系の話題あるいは芸術論なども時々とり入れて行なっている。これによって技術系の人と美術系の人との理解を深め、先に述べたようにホログラフィーという新しいメディアの実用化の一助になればと思っているわけである。毎回30~50人程度の人が出席して活発な討論が行なわれ、講演後にはそれに関係したサンプルのデモンストレーションがあったり、会員相互の情報交換も行なわれるなど充実した内容になっている。

次に1983年の例会について内容をあげておく。

- 第19回 2月25日(金) 東京大学生産技術研究所
  1. 超微粒子現象処方の特性とリップマン・ホログラムへの適用 池上皓治(沼津工業高等専門学校)
  2. 凹面鏡を用いたワンステップ・レインボウホログラム 山崎 均, 本田捷夫, 辻内順平(東京工業大学)
  3. 外国との情報交換について 岩田藤郎(凸版印刷(株)中央研究所)
  4. ホログラム撮影法のアイデア 岸本 康(東京大学)
- 第20回 5月27日(金) 富士フィルム
  1. ホログラフィック・ディスプレイの医学への応用 鈴木正根(富士写真光機(株))
  2. 外国との情報交換について 岩田藤郎(凸版印刷(株)中央研究所)
  3. レインボウ・ホログラムの視域拡大(II) 池上皓治(沼津工業高等専門学校)
- 第21回 8月26日(金) 東京工業大学

1. 特別講演 Paula Dawson (オーストラリア・ホログラファー)
2. アートとしてのホログラフィー(II) 齊藤明子・三田村峻右 (筑波大学芸術学系)
3. 外国との情報交換について 岩田藤郎 (凸版印刷(株)中央研究所)
4. 白色光再生平面型ホログラフィック・ステレオグラムの作製とその再生像質の評価 国生幸子, 本田捷夫, 辻内順平 (東京工業大学)
5. ホログラム展示室と実験室の見学

サーキュラーは年4回, 原則として例会の1カ月前に発行している. 内容としては前の例会で発表した内容を簡単にまとめてこれを掲載すると同時に, その他の報告, 巻頭言, 文献紹介, ホログラフィック・ディスプレイ関係のイベント等の紹介, 会からの連絡事項等を主体に作られている.

編集委員の手作りで, B5判で毎号10数ページ程度であるが, 1981年1月に第1号を発行して以来2年半順調に発行されている. 会費が安いために, 原稿を直接コピーしこれをステッパラーで止めて製本する方式で発行

しているので, みかけはあまり良くはないが内容は充実していると思う.

ホログラフィック・ディスプレイ専門の定期刊行物は世界的にみても非常に少なく, ほかに米国ニューヨークにある前記の Museum of Holography の発行している *holosphere*, またサンフランシスコにある L.A.S.E.R. (Laser Arts Society for Education and Research) が発行している *Laser News* くらいではないかと思われるのでユニークな存在といえ, おそらくわが国では唯一のものではないかと思う.

以上ホログラフィック・ディスプレイ研究会 (Holographic Display Artists and Engineers Club) の活動状況について報告したが, 今後われわれ会員としてはハードウェア側の人達とソフトウェア側の人達が共存する特異なグループであるこの研究会の活動が, ホログラフィーという新しいメディアがディスプレイの分野でひとつの有力な媒体としての地位を確立していくために少しでも役に立てばと考えている.

(1983年9月1日受理)